

# クロード・モネの油彩画「ル・プティ＝ジュヌヴィリエにて、日の入り」の褐色化（黄変化）したニス除去について

大原秀行<sup>1</sup>

## 1 はじめに

姫路市立美術館「國富奎三コレクション」は、平成6年（1994年）に医師の國富奎三氏によって姫路市に寄贈された近代ヨーロッパ絵画25作家30件のコレクションであり、非常に貴重な作品群である。

本稿において取り上げたクロード・モネの油彩画「ル・プティ＝ジュヌヴィリエにて、日の入り」は、その國富奎三コレクションの作品の中の最高傑作作品であり、2018年に吉備国際大学が姫路市より修復委託を受けた絵画10作品のうちの一点である。

これらの作品は吉備国際大学文化財修復総合研究センターにおいて修復を行ったのであるが、修復前の科学調査（非破壊分析）は文化財総合研究センター員、吉備国際大学外国語学部准教授の天下浩司氏<sup>2</sup>が担当した。

本稿では特に油彩画の画面の「洗浄－ニスの除去」について焦点を当てて考察した。

なお、この作品については姫路市立美術館紀要に『クロード・モネ《ル・プティ＝ジュヌヴィリエにて、日の入り》の保存修復および非破壊科学調査』のタイトルで掲載を予定している。

また、2018年度に修復委託された10作品は下記の通りである。

モネ「ル・プティ＝ジュヌヴィリエにて、日の入り」

マティス「ニース郊外の風景」

シスレー「望楼」

ドンゲン「バラ色のシャツを着た若い婦人の肖像」

ブラマンク「川沿いの村」

モンティセリ「モスクの前の集まり」

ペヒシュタイン「帆船」

ルノワール「母性」

ルオー「町外れ」

コッテ「静物」

上記の作品の中で、ルノワール作品は文化財総合研究センター員、吉備国際大学アニメーション文化学部教授の鈴木英治氏<sup>3</sup>が修復を行い、他の9作品は筆者が修復を行った。

## 2 「洗浄（クリーニング）」とニスの除去

油彩画の修復において、画面の「洗浄」は最も重要であり最も難しい修復工程である。

何故ならば、修復家はその作品の全画面に手を加えるからである。

油彩画修復における「洗浄（クリーニング）」については、かつてドイツ・ブラウンシュヴァイクの修復家クヌート・ニコラウス（Knut Nicolaus）が彼の著書（Handbuch der Gemäldekunde : Material-Technik-Pflege. 翻訳本「絵画学入門」（美術出版社 1985 年））の中で見解を述べている。その一文を翻訳の中（P267～P268）より引用する。

ニス除去についての賛否に関しては、美学的見地からも技術的見地からも、膨大な量の文献がある。しかし結局はこれらの文献は極めて概観的に示してあるにすぎず、せいぜい例として取り上げられた絵画に該当するだけである。とくにもっとも範囲が広くもっともデリケートなものの一つにかぞえられている絵画修復の分野においては、定説を立てることは不可能である。あらゆる絵画は、たとえそれが人物像の対の作品の修復の場合でも、個々の状態に合わせた調査と処置を必要としている。溶剤に対する作品の反応は、その構造や画家の使用した結合剤に左右されるだけでなく、むしろ作品の完成以後に手掛けられた修復にかかってくるのである。

絵画の洗浄（クリーニング）に関連するあらゆる問題は、いずれも過去幾世紀にもわたって行われた修復の実際と極めて密接に結びついている。事実五十年以上もたつ絵画では、修復されていない絵画は存在しない（もちろん例外はあるけれども）。ブラウンシュヴァイクのアントン・ウルリヒ公美術館の例のように、歴史の洗礼を受けてきた古いコレクションでは、画家の手から直接作品を入手していることが多いのであるが、そのようなところですら全ての絵画は最低でも一回、たいていは数回の修復を経てきている。もちろん十九世紀になってはじめて開設され、その作品の出所が多種多様なコレクションの場合、それは言うに及ばぬことである。たいていの画商やコレクターは「専属の」修復家を抱えており、彼らが新しく手に入れた作品は、たとえ批判的な目で見ることが必ずしもない場合でも、まずはじめに一度修復家の手に委ねた。張り枠あるいは基底材上に極く稀に簡単な記録を見出す以外に、そのような手入れについての記録はほとんど残らない。十九世紀およびそれ以前のまとまった報告が美術館の修復記録の中に見られる。これらの古い記録は今日一般に見られるように全てを網羅しているわけではないが、それでも貴重な示唆を与えてくれるし、ほとんどの絵画がほぼ五十年ごとに修復されていたことも教えてくれる。絵画修復の分野においては、画面の洗浄（クリーニング）、ニスの除去、そして補彩および加筆の除去がそれぞれ区別されている。

と、述べている。しかしこの見解はクヌート・ニコラウス氏が油彩画の歴史の古いヨーロッパにおける修復事情をもって書かれたものであるが、ほとんどが明治以降に作成された日本の油彩画の修復に関しては、コンセプトはほぼ同じでそれほど違和感のある見解とは思われない。しかし強いて言えば、現在ではそこにさらに科学分析調査（非破壊調査）が多く取り入れられてきたことである。

画面の「洗浄（クリーニング）」とは、画面に付着した埃やゴミ、例えば虫の糞、さらにはタバコのヤニなども画面の「洗浄（クリーニング）」の対象となる。さらに過去の修復段階における補彩、特に加筆も加わる。

これらのものを「洗浄（クリーニング）」するには、はじめに毛ばたきや毛先の柔らかい刷毛を使用する。それから柔らかい布。綿棒と変えていく。次の段階では水（蒸留水）や温水を綿棒に浸したもの、

さらに石鹼等の洗剤を浸したものを使用し、最後に薬品類を使用する。

### 3 ニス除去

近現代の油彩画には、あえてニス塗布されていない絵画が多く存在するが、ほとんどの絵画の一番上の層としてニスは引かれている。それは絵画に深みと輝きを与え、さらに汚れから、また物理的な影響や大気の影響から作品を保護するためである。

このニスにダンマー樹脂やマスチック樹脂等の天然の樹脂が使用されている場合、経年によりニスが酸化して褐色変化（黄変化）してしまう。するとニス層の下に存在する絵画自体が褐色のフィルターの影響で暗い絵になってしまう。そのためそれら天然樹脂をニスとして使用している絵画の場合には40 - 100年に一度は黄変化したニスを取り除き、新しいニスを塗布する必要がある。

しかし、このニスの除去作業は修復工程の中でも最も難しい作業である。それは褐色化（黄変化）したニスを除去するにはミネラルスピリットやエタノール等の薬品を使って褐色化したニスを取り除かなくてはならないからであり、過剰な薬品の使用によってはオリジナルの絵画層の絵具をも除去してしまう危険性があるからである。そのため、大学や美術館における絵画修復家を目指す初心者への実習においては、安易にニスの除去は行わせないようにしている。

### 4 クロード・モネの油彩画「ル・プティ＝ジュヌヴィリエにて、日の入り」の修復

作 者：クロード・モネ

タイトル：「ル・＝ジュヌヴィリエにて、日の入り」

制作年：1874年プティ

寸 法：54.0 × 73.0cm

技 法：油彩

支持体：キャンバス

額 縁：あり（外額有）

ガラス：あり

所 有：姫路市

#### 【作品の状態】

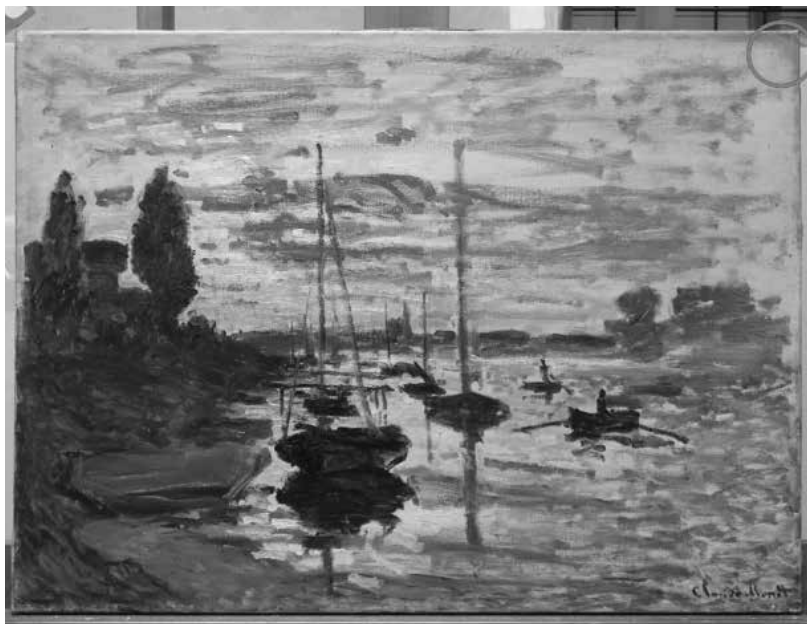
- ・ 絵画表面全体に汚れ
- ・ 裏面の汚れ
- ・ 絵画面のニスの激しい黄変化
- ・ 画面下部中央にキャンバス地の膨らみあり
- ・ 作品周辺部に表層のひっかき傷あり

この作品の修復工程は下記の通りである。

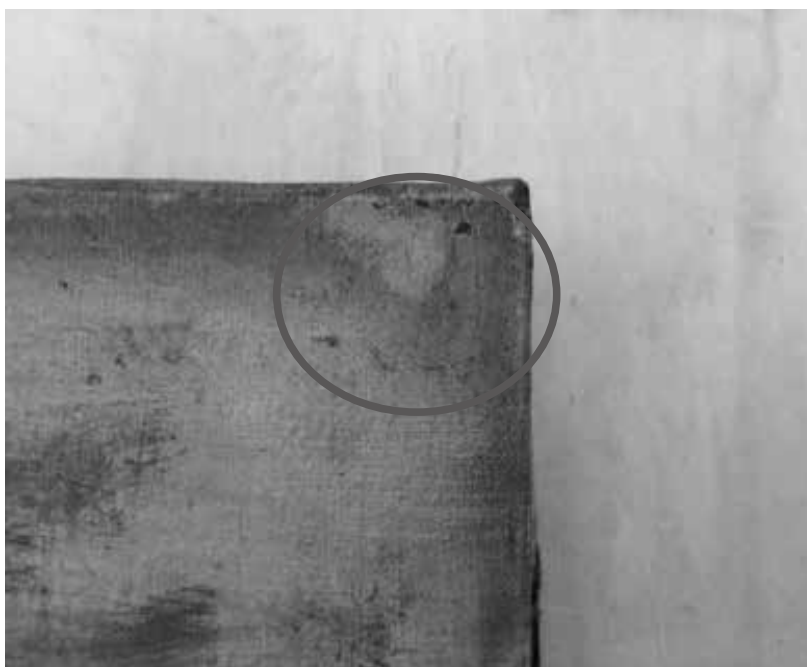
【修復工程】

- ・ 修復作業に入る前に、科学分析調査（非破壊調査）を行った。
- ・ 写真撮影（普通光線、斜光線、紫外線、赤外線、X線）を行った。
- ・ 画面の洗浄（クリーニング）を行った（ぬるま湯と綿棒を使用）。
- ・ 裏面のクリーニングを刷毛とミュージアムクリーナーを使用して行った。
- ・ キャンバス地下部の膨らみは、キャンバス地と木枠の間に異物（ゴミ）が混入しており、取り除く。
- ・ 絵画面の周辺部にある軽いひっかき傷は剥離を起こしていないため、処置は行わなかった。
- ・ 褐色化（黄変化）したニス除去を行った（希釈したエタノール水を使用）。
- ・ ダンマルニスの塗布を行った。
- ・ 報告書の作成。





○部分のニスの除去を試みる



- ・画面の右上部分の一部の表面のニスの除去をする。
- ・褐色化（黄変化）したニスの下から鮮やかな空の青色が現れる。
- ・この結果を所有先の美術館学芸員とともに観察し、全画面のニスの除去を決定した。



ニス除去には精製水で20%程度に希釈したエチルアルコールを使用



画面の右側部分の褐色化（黄変化）したニスの除去



ニス除去後

## 5 結果と考察

今回のクロード・モネの油彩画「ル・＝ジュヌヴィリエにて、日の入り」の修復において、絵画面の褐色化（黄変化）したニスの除去を行ったのだが、ニスを除去するという決断をするまでには、実際にニスの除去作業を行った時間の数倍を要した。

修復家としての長い経験から、褐色化（黄変化）したニスを除去するにはエタノールで除去できることは分かっていた。しかしいったん絵画表面のニスを除去してしまった場合、もう二度と元には戻せないからである。作品上の褐色化（黄変化）したニスによって、暗い趣きのある作品として長年慣れ親しんでいた姫路市民はじめ美術愛好家にとって、本当に絵画を明るい「日の入り」の絵にしてしまっただけで良いのだろうかと思っただけでなく、このような問題は修復家の中でしばしば起こるものである。その時修復家は決して修復家一人の意見で修復を進めてはならない。常に修復家、科学者、美術家の三者の合意が必要であることが求められるのである。今回の場合、筆者の近くには非破壊分析を専門とする科学者は横にいたために、多くの助言をもらっていたが、さらに姫路市立美術館の学芸員はじめ多くの美術家の意見を統合して、「ニスの除去」という最終結論に達した。その結果、褐色化（黄変化）したニスは除去され鮮やかな夕暮れ時の青空がよみがえった。

今後の課題としては、吉備国際大学文化財総合研究センターにおいては解決出来ていない、非破壊分析による使用ニスの特定期法の研究を進めることである。

所属：

1. 吉備国際大学文化財総合研究センター
2. 吉備国際大学外国語学部外国語学科
3. 吉備国際大学アニメーション文化学部アニメーション文化学科





ニス除去前後の通常写真（白色の可視光線による写真）

